命を見つめて生きる力を育む国語科の授業に関する総合的研究

◎石井 正己（東京学芸大学日本語・日本文学研究分野）
〇松原 洋子（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
〇菅　 俊輔（東京学芸大学附属小金井中学校国語科）
石井 健介（東京学芸大学附属小金井中学校副校長）
田中 成行（岩手大学教育学部）
代表者連絡先：**ishiim@u-gakugei.ac.jp**

【キーワード】国語科　命　生きる力　病　戦　災　古文教材　教材開発

1　本プロジェクトの目的

東日本大震災から 5 年が経過したが、生や死をどう受け止めるかが緊急の課題になっていて、その深刻さは深まるばかりである。教育の現場もそうした現代社会の動向と向き合わねばならないことは言うまでもない。なかでも、思春期を迎えた子供たちに対する取り組みは急務である。そうした状況を踏まえて、東京学芸大学附属小金井中学校の国語科では、平成 24 年度の公開授業研究会以来、命を見つめて生きる力を育むための国語科の授業について議論を重ねてきた。今回 2 年計画で採択されたプロジェクトの 2 年目に当たる本年度は、現代文の教材を扱った昨年度の実績を踏まえて、事前の現地調査と資料収集を実施し、病（やまい）・戦（いくさ）・災（わざわい）をテーマとする古文の教材による授業を行い、合わせて関連する講演を実施することを計画した。

2　本プロジェクトの実施内容

本年度実施したプロジェクトの経過をたどると、平成 27 年 8 月から 11 月にかけて、松原洋子・菅俊輔のふたりはそれぞれ授業で扱う教材について現地調査と資料収集を実施した。それぞれの調査・収集の成果を持ち寄って、授業計画の具体的な立案と検討を行った上で、11 月に東京学芸大学附属小金井中学校の第 27 回教育研究協議会を中心として授業を実施した。10 月には、石井正己が宗教学者の山折哲雄先生との対談を行った。12 月には、附属小金井中学校の全校生徒と「国語科研究」の授業を履修している大学生と合同の形式にして、石井正己が講演を行った。12 月から平成 28 年 1 月にかけて、これらの成果を原稿にまとめた。この間、対談や講演のテープ起こしを矢部敦子さんにお願いし、全体の調整を図りながら原稿を完成し、平成 28 年 2 月、報告書 100 部を 108 ページで印刷・発行した。その内容を目次で示すと、次のようになる。

プロジェクトの概要

第 1 部　命を見つめるための対談と講演

命を見つめていきるために　対談　山折哲雄・石井正己
命を見つめて生きるための『遠野物語』 石井正己
第 2 部　附属小金井中学校の授業
病（やまい）と向き合う―『竹取物語』を中心に―　田中成行
戦（いくさ）と向かい合う―『平家物語』を中心に、今と昔の戦の比べ読みを通して―
松原洋子
災（わざわい）と向き合う―『方丈記』と鴨長明を中心に―　菅俊輔
第 3 部　命を見つめて生きるための教材
家族を探して（私の被爆記）　加藤正矩
「あきらめるより以上の事」～正岡子規が見出した命の見つめ方～　菅俊輔
枝幹二氏の遺書　松原洋子
第 4 部　その他の関連する講演
記憶とコミュニティの再生　石井正己
柳田国男と妖怪　石井正己
編集後記

第 1 部から第 4 部の趣旨は、それぞれ次のとおりである。

〈第 1 部　命を見つめるための対談と講演〉

石井正己が宗教学者の山折哲雄を京都に訪ねて行った対談を、「命を見つめて生きるために」としてまとめた。実際の対談はもう少し長かったが、区切りのいいところでとどめることにした。本プロジェクトの根幹に関わるお話から、ちょうど先生が監修に関わった神奈川近代文学館の柳田国男展が開催されている時期であり、話題はそうした内容にまで広がった。山折先生には校正のご負担をお願いして、正確さを期した。

その対談を受けて、石井が附属小金井中学校で行った講演を、「命を見つめて生きるための『遠野物語』」としてまとめた。この講演は中学校の全校生徒に加えて、「国語科研究」の授業を履修している大学生が出席したが、これはそのすべての記録である。終了後、全校生徒が書いた感想文をすべて拝読したが、ここには掲載しなかった。

〈第 2 部　附属小金井中学校の授業〉

附属小金井中学校の授業は、第 27 回教育研究協議会の開催に合わせて実施した。国語科の研究主題は「「言葉の力」を実感し合う学習指導～命をみつめ生きる力を育む学び合い（2 年次）～」であった。松原洋子が 2 年生、菅俊輔が 3 年生の授業を行い、田中成行と石井正己が助言者になり、附属竹早中学校の森顕子が協議会の司会者を務めた。

田中は 1 年生の授業を担当する予定であったが、10 月に岩手大学教育学部に転出されたので、研究協議会での授業は行わず、助言者に回った。報告書には授業を行うことを想定して文章を書くことにした。それは、田中成行「二年生―病（やまい）と向き合う―『竹取物語』を中心に―」、松

原洋子「二年生―戦（いくさ）と向かい合う―『平家物語』を中心に、今と昔の戦の比べ読みを通して―　」、菅俊輔「三年生―災（わざわい）と向き合う―『方丈記』と鴨長明を中心に―」としてまとまった。

文章をまとめるにあたって注意したのは、単なる授業実践にならないようにするということであった。国語科教育の授業実践の報告を見ても、個別の事例が並ぶだけで、学問上も教育上もほとんど役立つことがないからである。そこで、授業を実践するための現地調査や資料収集、そして、授業を計画・実施するにあたっての考え方を書くことに留意した。ただし、昨年度の事業の報告に対して、生徒の反応を入れたほうがいいというご意見があったので、本年度はその点を配慮して、生徒の反応を加えることにした。昨年度は新しい教材開発に力を注いだので、本年度は幾分かでも現行の教科書に配慮することを相談しながら進めた。

〈第 3 部　命を見つめて生きるための教材〉

加藤正矩先生は、昨年度、附属小金井中学校の全校生徒と、大学の学生・一般の方々に講演をしてくださり、それは昨年度の報告書に掲載した。しかし、その際にお配りくださった体験記「家族を捜して（私の被爆記）」は割愛せざるをえなかった。そこで、菅俊輔が表記を改めるなどして整え、加藤先生に校正を見ていただいて掲載した。昭和 20 年の 8 月 6 日から 15 日までを日記風にまとめた記録であり、末尾には「防火用水槽」「建物疎開」など、今日ではわかりにくくなった言葉に注記が付けられているのも貴重である。また、菅俊輔の「「あきらめるより以上の事」～正岡子規が見出した命の見つめ方～」と、松原洋子の「枝幹二氏の遺書」は、昨年度の報告書に授業実践が掲載されているが、その時に使用した教材に補訂を行い、改めて掲載した。

〈第 4 部　その他の関連する講演〉

ここには、石井正己がこの間に行った講演の中から、「命を見つめて生きる」というテーマに関わるものを収録しておくことにした。「記憶とコミュニティの再生」は、東京大学で行われた「「sustainability と人文知」研究プロジェクト（総長裁量経費）最終シンポジュウム―3・11 以降の危機の中での人間・社会の再生」において、竹沢尚一郎氏の報告「コミュニティと自立」に対して述べたコメントである。また、「柳田国男と妖怪」は、兵庫県神崎郡福崎町の小学校 5・6 年生と中学生を対象にした講演である。附属学校との連携ということからは外れるが、震災後の現代社会をどのように考えるかという問題に触れた講演と、妖怪を通して小学生・中学生に命を見つめる契機を考えさせた講演であり、このプロジェクトとつながりがあると判断した。

３　成果と課題

プロジェクトの推進にあたっては、東京学芸大学附属小金井中学校の全面的な理解があり、昨年度に引きつづいて全校生徒を対象にした講演を実施することができた。それに加えて、会場に東京学芸大学の学生が同席して、同じ立場で参加することができた意義は大きい。それぞれの感想文を読むと、生徒も学生も好意的に受け止めていることが確認できた。今後、大学と附属学校が連携を

進める際の、一つのモデルケースになると思われる。

教材研究や研究授業という点から考えると、実地調査や資料収集を十分に行った上で授業に取り組むというのは、こうしたプロジェクトの予算措置がなければ実現できないことであった。そうした点から考えても、こうしたプロジェクトが行われる必要があることは間違いない。開発された教材もそれぞれ個性的であり、附属学校の教育水準をよく示すものとなっている。ただし、内容としてはやや専門的な部分が大きく、さまざまな点で忙しい一般校の授業の中に導入するのは容易ではないと想像される。もっと教科書教材に即した研究を進めることによって、いっそうの普遍化を図る必要がある。

今回は、東日本大震災後の国語科教育のあり方を考えて、「命を見つめて生きる力を育む」というテーマを設定した。実施にあたっては、思春期にある生徒それぞれの家庭の事情を配慮しなければならないところもあって、重い課題となった。だが、震災教育が形骸化し、平和教育が困難になる中で、こうしたテーマは、重たくても持続してゆかなければ意味がない。それとともに、それだけに固執しすぎることも懸念される。機会があれば、やや視点を変えて、「自然を見つめる力を育む」といったテーマで、次のプロジェクトを実施してみたいと考えている。